

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

時空間をこえたつながりを目指して＜基幹研究：  
中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 百合子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009586">https://doi.org/10.15021/00009586</a>

# 時空間をこえたつながりを目指して

文・写真 八木 百合子

中南米を対象とする国立民族学博物館（以下、民博）のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトでは、この地域にかんする民博が所蔵する既存の標本資料を活用しながら、その資料情報を強化することに作業の主眼をおいた。とくに重点的に取り組んだのが、資料の豊富なアンデスの民衆芸術にかんするものである。アンデス地域については標本資料にかぎらず、先人たちが集めた膨大な画像や文献資料が存在する。そこで、これらの文化資源を活用して、標本資料が収集された地域や制作した人物の情報だけでなく、モノのつくり方や実際にモノをつかって生活する現地の人たちの様子などの情報も付け加えることで、従来の基本情報にさらなる厚みをつけていくことを目指した。これをつうじて、モノとかがわる人びとが時空間をこえてつながるデータベースを築きあげていくことが最終的なねらいである。以下では本プロジェクトの特徴と成果の一部について紹介したい。

## 画像コレクションの活用

標本資料の背景情報を付加していくうえで大きな役割を果たしたのが、2つの画像コレクションである。いずれも標本資料の収集に携わった本館名誉教授によって撮影された画像の集大成である。

ひとつは、南山大学人類学博物館に保存されている「アンデス民族学画像コレクション」で、アンデス民族学研究の第一人者である友枝啓泰が1964年から40年以上にわたるフィールドワークで撮影した45,000点あまりの画像が収蔵されている。目録によると、ここにはアンデス地域の諸民族の生活文化にかんする調査画像のほか、1969年に実施された「大阪万博民族資料収集の旅」や1989年開催の民博特別展「大アンデス文明展」にかんする記録も残されている（加藤・河邊 2006）。本プロジェクトでははじめに、これらの画像を標本資料の参考情報として利用する手続きを踏んだ。

これに加えて、同じく1960年代からアンデスで調査をおこない、現在の本館展示場にあるアンデスの民衆芸術にかんする標本資料の多くを収集した藤井龍彦が所有する約16,000点のスライドを活用した。まず、このスライドの一部（6,090点）を民博が実施する「地域研究画像デジタルライブラリ（通称 DiPLAS）」にデジタル化を依頼した。そして、残りをプロジェクト内でデジタル化し、それらのなかから標本資料とかがわりのある現地写真や収集の際に撮影した

画像を抽出し、個々の標本資料の背景情報として紐付けた。

また、過去の現地情報をデータベースに組み込むだけでなく、画像に写った人物や情報をたよりに、実際に標本資料の出所となった地域や人びとのもとを訪れ、制作に携わった人の現状やモノの背景情報を把握するのに役立てた。こうした作業をつうじて、モノをとりまく人びとの過去と現在をつなげていこうと試みた。

## 制作者をたずねる

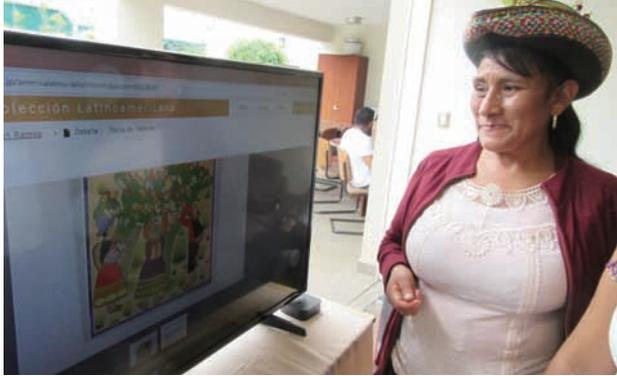
この作業では、既存の情報と現地の専門家の助言を踏まえ、制作者をたどりやすい種目を選定し、それらの制作を担う工房を訪問した。残念ながら、民博の標本資料の制作にあたった第1世代の職人のほとんどがすでに他界していたが、それでも、その息子や孫といった後継者との出会いをつうじて、モノ自体についての情報や制作にかんする現状を追加・更新することができた。そのなかには、代々継承されてきた一族の強みを活かして新たな展開をみせるケースなど興味深い動向もみられた。

たとえば、箱型祭壇づくりで有名な口ベス家の場合、創業者によって20世紀前半に始まった祭壇制作が、第3世代の孫にまで受け継がれている。それが第4世代に達した現在、地元で一族のコレクションを展示する博物館を運営するに至っている。創業者の工房を改装してつくった博物館には、先代が残した箱型祭壇のみならず、この一族特有の意匠をあしらった家具や玩具などの木工作品も並んでいた。博物館を管理する4代目によれば、木工作品は3代目の手になるものであるという。

これらの情報を踏まえ、データベースでは検索項目に「制作者」という分類を設けて職人ごとに作品の閲覧・検索ができる機能を付けるだけでなく、「家系」という分類も加えることで個々の職人の系譜をたどり、どのように継承されてきたのかを跡付け、相互の関連や作風の違い、モノづくりの変遷がわかるようにした。今後は、各家系に連なる職人たちのさらなる広がりも視野に、随時追加・更新をおこなっていく予定である。

## ワークショップの開催

他方、制作者を追跡していくうえで問題となったのは、作者不詳の場合である。民博の中南米関連の標本資料のなかに



ワークショップに参加したペルー南部サルワ村出身の女性。データベースに父親の描いた板絵を見つけ、その記憶を語る（2020年1月、ペルー・リマ市）。

### 八木 百合子（やぎ ゆりこ）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター助教。専門は文化人類学、ラテンアメリカ地域、とくにアンデス地域の民族学研究。著書に『アンデスの聖人信仰一人の移動が織りなす文化のダイナミズム』（臨川書店 2015年）、論文に「聖母の奉納品にみるアンデスの意匠—クスコのアルムデナ教会の事例から」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編『古代アメリカの比較文明論—メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（京都大学学術出版会 2019年）などがある。

は、職人から直接買い付けたもの以外にも、展示会や収集家をつうじて入手したのものがある。後者の場合、出所にかんする情報に乏しいことが多い。

この問題に解決の糸口が見出されたのは、現地のカウンターパート機関である文化芸術社会協会（ICTYS）の協力のもと、職人たちを集めておこなったワークショップをとおしてであった（2020年1月17日、リマ市にて開催）。ワークショップ

開催の第一目的は、一連の作業の最終段階で用意した試験版のデータベースを現地の人たちに実際につかってもらい、操作性などについて意見交換をすることにあったが、それと合わせて、職人たちの側から作者不詳資料にかんする情報が得られることも期待していた。

ワークショップには、箱型祭壇や焼き物のほかにも、板絵、十字架、ヒョウタン細工、銀細工、織物などの制作に携わる職人32名が参集した。職人たちは、データベース上の資料情報から、地域や制作者を判別するにとどまらず、それらのモノに関連する人物がいまどこで、何をしているのか、といった情報まで教えてくれた。じつは彼らには独自のネットワークがある。出身地域が同じであれば、業種をこえたつながりをもっているのである。

また、ここに参加した職人のなかには、民博に所蔵されている標本資料とゆかりのある人物もいた。たとえば、かつて父親が描いていた板絵をデータベース上に発見した人や、半世紀前に自分が手がけた作品を日本で開かれる博覧会のために船で出荷したという古老もいた。こうした人たちに遭遇したこともワークショップの大きな収穫であり、彼らの記憶がモノにかんする有益な情報をもたらしてくれる可能性を見出すことができた。

## フォーラムの場の提供にむけて

このように現地の制作者のもとを訪れ、モノにまつわる情

### ロペス家

- ▶ 制作品：箱型祭壇、十字架
- ▶ 創業者：ホアキン・ロペス・アンタイ  
(アヤクチョ生まれ、1897-1981)  
箱型祭壇制作の第一人者。ペルーの民衆芸術家として初めて文化振興賞を受賞（1975年）
- ▶ 拠点工房：ペルー・アヤクチョ市



ホアキン・ロペス  
(写真：ホアキン・ロペス博物館提供)



左：イグナシオ・ロペス、右：マルドニオ・ロペス  
(写真：ホアキン・ロペス博物館提供)



ホアキン・ロペス博物館（アヤクチョ市）  
(2016年より旧家（工房）を利用して運営)

ロペス家系譜図（本プロジェクトのデータベースより）

```

graph TD
    A[ホアキン] --- B[イグナシオ]
    A --- C[マルドニオ]
    B --- D[アデライダ]
    B --- E[アルフレド]
    B --- F[ハイデ]
    B --- G[リリア]
    B --- H[アリーナ]
    B --- I[フリオ]
    B --- J[リゴベルト]
    D --- K[バトリシア]
            
```

ロペス家関係図（抜粋）  
\*：祭壇職人  
白文字：死去

ロペス家系譜図（本プロジェクトのデータベースより）。

報を収集するなかでみえてきたのは、一般的な資料情報から抜け落ちたさまざまな人たちの存在の重要性である。工房制をしくペルーの職人たちが手がけた作品の多くは、じつは多様な人たちの手の入りこんだものである。すなわち、その制作過程では、兄弟姉妹や配偶者、子供たちをはじめ周囲の人たちの協力がある。だが、そうしてでき上がった作品をわれわれが手にする際に知りうるのは、作者としての1人の職人の名前にすぎない。

今回、情報を提供してくれた人たちの多くは、そうした制作現場の裏側にいた人たちである。インフォーマントの女性のひとは、祭壇職人であった夫の傍らで、祭壇の背景となる草木などの細かいパーツづくりを手伝っていた当時のエピソードを語ってくれた。彼女は亡くなった夫が現役の時代に、ほとんどおもてに出ることのなかった人物である。

こうした制作の場をとりまく人たちの存在もまた、ひとつひとつのモノに豊かな情報を提供してくれる要素であり、彼らの情報をいかに取り込んでいくか、今後、本データベースのフォーラム型としての機能を強化するためにも十分検討していきたい。

### 引用文献

加藤隆浩・河邊真次 2006「友枝啓泰アンデス民族学画像」『人類学博物館紀要』24: 31-55。